

邂逅

男
少年

開演

男が一人、立っている

気だるげな動作でガス灯の火を消す

男 ……おはよう。

男 朝が来た。憂鬱な朝が。朝ってやつは基本的、誰にとっても押し並べて、清々しく訪れるものらしい。あんたにとってもそうなのかい？
そうか、そりゃ心底羨ましいね。だがそれは、俺にとっては全く縁のない話。眠れない夜が終わり、憂鬱な朝が来る。その繰り返しのうちの過程。ただそれだけさ。

男 余りにも不平等なこの世界の中で、時間だけはどんな人間にも平等に巡ってくるといふけれど、それは虚言だ。妄言だ。もつと言うなら幻想だ。……なんで俺がそんな事言うか・だって？ 教えて欲しいか、教えてやろうか。いいだろう。俺にははっきりわかるんだ。だって俺には……おっと失礼。

男、ガス灯の火を灯す

男 ……こんばんは。

男 すまないね、話の途中で。何しろ俺には仕事があつてね。いや、そんな大層な仕事じゃない。難しくはない、技術も要らない。命がけてつてもない。でも俺はこの仕事をしなきゃならんだ。永久に、永遠に、この小さな小さな星の中で、一人。

男 ……あんた、ガス灯つてもものを知ってるかい。俺が火をつけたり消したりしているこれさ。そうこれこそが、俺の仕事なのだ。永遠に続く仕事なのだ。俺は眠れない夜をこいつと共に明かし、憂鬱な朝をこいつと共にやり過し、どうにか日々を生きている。言うなればこいつは俺の、相棒。……で、あると同時に、俺をここに縛り付ける楔・でもあるのだ。

男 ああ、朝か。

男、ガス灯の火を消す

男 ……おはよう。

男 朝が来た。憂鬱な朝だ。俺をこの星に縛り付ける忌々しいガス灯の影が俺の上に伸びる。ああ忌々しい。それにしても愛おしい。この孤独を、やるせなさを、唯一共有できるお前は俺の大切な相棒だ、なあ俺の

最高にして最大の友達にして仇敵よ。……ああ、自分でももう何を言っているのかわからない。

男 ……それにしても一人だ。俺は一人。どんなに話しかけたって、お前はちっとも答えちゃくれない。俺のこの孤独な眩きは、誰にも看取られる事なく消え行くさだめ。ツイート、ツイート、ツイート。ツイートは俺のものだけだから。一人きりのタイムラインには寂しげな俺の眩きだけが蔓延るのさ。

男 ツイート、ツイート、ツイート。

少年 リツイート。

男 え？

少年が立っている

少年 こんにちは！ ねえあなたは今、どうして街灯を消したの？

男 そういう指示なんだよ。……おはよう。

少年 指示？ 指示って何？

男 ガス灯を消すことさ

男、ガス灯の火を灯す

男 ……こんばんは。

少年 それじゃ今街灯を点けたのはなんで？

男 それもまた指示さ。

少年 指示ってなんなの？

男 仕事さ。俺の仕事。そうするようには俺は、指示されている。俺はそれをこなす。ガス灯の火を点けそして消す。それが俺の仕事。

少年 ふうん。

男 わかるか？

少年 ううん、なんだかよくわからない。

男 そうか、まあそれでもいいんだ。俺も別にわかってもらおうとは思ってないしな。

少年 そうなの？

男 そう。仕事ってのはそういうもんだ。

少年 ぼくも大人になればわかるかな？

男 わかるかもしれないし、わからないかもしれない。もしわかったら俺と同じで歯車だ。歯車になるんだ。この世界の、宇宙の歯車に。わからなかったら……どうなるんだろうな。俺にはそれがわからない。

少年 歯車？ あなたは歯車なの？ ちっともそうなふうに見えないけど。だって見たところ、あなたは全然ギザギザしていないんだもの。

男 ……物の例えだよ。さてはお前馬鹿だな。それともただの物知らず……おっと、

男、ガス灯の火を消す

男 おはよう。

少年 おはよう。

男 物知らずでも礼儀正しい。いいことだ。挨拶は大事だぞ。

少年 ねえ、

男 何だ。

少年 このあなたの星をちよっと一周してきてもいいですか？ 今ほく旅をしているんだ。自分の星を出てね、いろんな星に行ってるの。あなたの星のことも色々見てみたい。

男 いいさ、してみろよ、ぐるっと一周。ただ、

少年 うわあ、ありがとう。じゃあ、行ってきます。

男 大股で三步も行けば一周するけどな。

少年、舞台上を一周してすぐ戻ってくる

少年 ほんとだ。

男 だろ？

少年 小さいんだねこの星は、すごく小さい！ ほくのいた星よりも、ほくが見てきたどの星よりもずっとだ！

男 そうなのか。

少年 ああそうだよ、そして何も無い！ あなたとこの街灯以外は何も！ ほくのいた星だって随分小さいと思っただけで、ほくの星には山が三つあって綺麗な花がいて、そして忌々しいバオバブがいつだって生えようとしていた！

男 バオバブねえ。

少年 この星にはバオバブは生えないの？

男 生えないよ。

少年 ……だとしたらほく、それだけは羨ましいかな。

男 何で？

少年 何で！？ あなただったら、そんなことを聞くの？ バオバブはね、大変なんだ。ほっておくともうどうしようもないくらい大きくなって、滅多なことでは取り除けなくなるんだよ。ほく三本のバオバブをほっていたためにバオバブに星を乗っ取られた怠け者のことだって知っているんだ！

男 ……それは確かに困るなあ。

少年 でしょ！ だからバオバブが生えないあなたの星は……。……。

男 どうした。

少年 ううん、ほく、旅をしているでしょ？ だからほくの星のバオバブは今どうなっているのかなって。

男 旅、か。

少年 でも、もう戻らない。ほくの星には。

男 そうか。

少年 うん。

男 まあ、ワケは聞かないさ。

少年 ありがとう、あなた、優しいんだね。

男 まあな。

少年 あ、

男 おっと、

男、ガス灯の火を灯す

少年 こんばんは！

男 ……ああ、こんばんは。

少年 どうしたの？

男 いや、なんかさ……こつ、挨拶を交わすという事が、余りない経験なものだなということに今、思い当たったのさ。

少年 え、そうなの？

男 ああ、ずっと一人だったからな。

少年 そうか、あなたはずっと一人でこの街灯を着けたり消したりしていたんだね。

男 ああ、そうだ

少年 寂しくなかったの？

男 え？

少年 あなたはずっと一人で、寂しくなかったの？

男 ……

間

少年 ……なんか、ごめんなさい。怒らせてしまった？

男 ……いや、そんなことないさ

少年 ああよかった。ほくてつきりあなたを怒らせてしまったのかと。

男 怒るもんか。怒らない、そんなことで。大人はそう簡単に怒らないものだ。

少年 そうだよな、大人か。大人があ。大人ってすごいね。仕事をして、歯車になったりならなかったりして、色々なことをわかっていて、そして滅多なことでは怒らない……ほくもいつか大人になれるのかな。

男 なりたいのか？ 大人に？

少年 なりたいよ、大人に。なってみたい。

男 ……なんだかお前はずっとそのまま感じがするな。

少年 このまま？

男 なんか、よくわかんないけど、そんな気が。

少年 そっかあ。

男 ……

少年 ねえ、そうなのかな。ぼくは大人になれないのかな、

男 怒った？

少年 怒らない、怒らないよ。ただちょっと残念だなんて、

男 そうか。

少年 そうだよ！ ねえ、ぼく今怒らなかったでしょ？ これって大人に一歩近づいたってことだよね？

男 そうかもな。

少年 今まさに大人に一歩近づいたぼくには、わかることがある！
実はあなたは寂しくなんてないんだ、大人だからね。それに、この街灯がいつだってあなたと一緒にいるんだし。

男 違うな。

少年 え？

男 違う、と言ったんだ。

少年 なにが？

男 街灯、とお前はこれと呼ぶが、それは間違いだ。

少年 違うの？ そうなの？ これは街灯ではないの？

男 こいつはただのガス灯。街灯にはなりえない。永遠に、永久に。

少年 え、どうして？

男 この星にいるのが俺一人だからさ。ここは街ではない、俺一人しかないから。

少年 一人だと、街ではないの？

男 ああ、街は人の集合体さ。だからここは街ではない。だからこいつは街灯ではない。ただの、ガス灯。

少年 そうなんだ。

男 そうさ。

少年 でも、

男 なんだ

少年 今は、ここは街だよ。

男 は？

少年 だって、ぼくがいるもの。あなたと、ぼくがいる。あなたはひとりじゃない。だから今ここは街になる。そうしたら、このガス灯は、街灯になる。ね？

男 ああ……ああ、そうなのかも・な。

いつの間にか朝が来る

男はガス灯の火を消さない

少年 おはよう。

男 ……

少年 消さないの？

男 ……

少年 朝が来たよ、街灯は消さなくちゃならない時間。あなたは灯を消

さなくてもいいの？

男 ……ああ、

少年 え、いいの？

男 ああ

少年 でも、

男 いいんだ。

少年 仕事？（なのにな）

男 そういう時だって、ある。

少年 そうなのなあ……

男 いつか。

少年 え？

男 いつか、わかる時がくるさ。

少年 それも、大人になるってこと？

男 そうかもな。

少年 ふうん。

二人、腰を下ろしぼんやりとしている

やがて夜が来る

少年 こんばんは。

男 ……ああ、こんばんは。

少年 三日目の夜だ、ぼくがこの星へ来てから。

男 そうだな。

少年 あっという間に過ぎていったように感じるね。

男 実際、あっという間さ。この星における一日の感覚は、短くなり続けているんだ。

少年 ……そうなんだ。

男 昔は、もっとゆっくりだった苦だった。こんなに何度もつけたり消したり・なんて。

少年 仕事って、大変なんだね。

少年は徐に立ち上がる

男 行くのかい。

少年 うん、そろそろ行くよ。三日かあ。ちょっと長居しちゃったね。ぼくの旅はまだまだ終わらないんだ。先を急がなくちゃ。

男 そうか。

少年 うん。

男 どこに行くんだ。

少年 わからない。でも、ここではない、どこか。

男 そうか。

少年 そうだよ。そうなんだ。この宇宙には、ぼくの知らない星がいっ

ばいあつて、知らない人がたくさん生きてるんだ。それを見て回るんだよぼくは、

男　なんで？

少年　なんで……うーん、大人になるため、かなあ。うん、そうだね、それだけじゃないにしても、その理由は大きいに違いない、色々なことを見て聞いて、色々なことを知るために、ぼくは

男　なあ、

少年　え？

男　なああおのさ、もし、お前さえよかったら……

少年　何？

暫しの間

男　ん、いや、何でもない。気を付けてな。良い旅を。

少年　ありがとう！　あなたも、お仕事がんばってね！

男　ああ、じゃあな。

少年、笑顔で手を振りいなくなる

その姿を見送った男、ゆっくりと腰を下ろす

やがて再びの朝が来るが、男はガス灯を消さない

男　朝が来た。憂鬱な朝。孤独な朝。

男　俺ただ一人のこの星の、垂れ流される眩きの、その寂しげな色に似た、ひとりぼっちの朝焼けと。

男　ほんの数日間、街だったように見えた俺の星。俺一人のいる星。俺とガス灯だけの、星。

男　ツイート、ツイート、ツイート。

リツイートはない

男　……なあ、お前も、街灯になり損ねたな、名も無きガス灯、俺の、相棒。

男、ガス灯を見上げるとどこか気だるげに灯を消す

男　……おはよう。

男はガス灯を見上げている

その姿は次第に溶暗していく

幕